救済の原風景 #1

深野治

「牧場の少女」 油彩・キャンバス　1165x925mm 1951

自己のうちに音楽をもたず、甘き楽のしらべにも心動されざる人は、裏切りと悪だくみ、追いはぎにこそふさわしい。その魂の動きは夜のごとく鈍く、その情は冥府のごとく暗し。そのような人を信じてはならぬ！音楽に耳を傾けよ！
(シェクスピア「ベニスの商人」)

1

寺田健一郎の画家としての出発点にあるのは、1951 年の二科展に初入選した 「牧場の少女」 である。ときに二十歳。

それ以前から絵を描き続けていたのはいうまでもないが、その後に画風の変貌を重ねていく彼自身が何かにつけて、この作品からおのれの軌跡を語り起こしたことからも、いわば処女作として位置づけ得よう。

1966 年に新築移転したアトリエ (福岡市中央区六本松 3 丁目) の壁面のよく目立つところに、この「牧場の少女」はずっと掛けられていた。「わがささやかなアトリエの壁の一隅に、一枚の古ぼけた絵がかけてある。ポプラ並木を遠景に、牛がのんびり草を食む緑の牧場をバッ

クに、三脚イスにすわった髪の長い少女を横向きに描いている。少女趣味すれすれの、よくいえば叙情性の強い絵だ。これが私にとっては記念すべき 23 年前の二科展初入選の作品なのである。」

と新聞のエッセイに自ら記している。(1973 年西日本新聞「バスに乗り遅れた? 画家の独り言」)。

私が初めて寺田アトリエを訪ねたのは、1961 年の年の暮れ近くだった(と思う)が、そのころアトリエは薬院中溝町 9 番地(現在の福岡市中央区薬院 2 丁目 49) にあった。

たしか四軒の世帯が入った、長屋の一番奥の部屋だった。玄関脇に小部屋、まんなかが板張りの広いアトリエ、奥が居室と台所という間取りだった。

そのアトリエでは「牧場の少女」は見ていない。壁にあったのは、強いタッチと硬い調子の暗鬱なアンフォルメルの作品ばかりであった。1970 年前後から現われてくる華やかな色彩のコーラスからは想像できない暗さであった。

おおまかにいえば、 寺田健一郎の画風は、三つの時期に分けられよう。

1950 年を前後する叙情 (具象) 時代。

1960 年を前後する暗鬱なアンフォルメル時代。

1970 年前後に始まる明るいカラリズムの時代。